

映画に見るスペイン社会の変遷

エレナ・ガジェゴ

現代スペイン映画とその変遷を理解できるように、スペイン映画の誕生まで遡って、もっとも際立っている特徴を分析しなければならない。

ウトウレラ¹によるとエスパニョラーダ (españolada) の発生は、スペイン映画そのものの始まりと一致する。エスパニョラーダとは、スペイン語の辞典によると「人々のふるまい、見せ物あるいは文学作品で、スペイン人の性格を誇張したり歪曲しているもの」と定義している。その一方、一般的なテーマ別百科辞典では、その使い方に軽蔑の含意があることを指摘し、かなり重要な語義と説明を付け加えている。つまり「けばけばしいという意味でスペイン的なものに限って使用される」、「誇張、虚勢を張る、またはタンバリン（お祭騒ぎ）のシーン」そして「フランスでは特に軽蔑的な意味でよく用いられる」としている。しかしこれは、ある一つの文化的側面と関係がある。旅行のポスターによくあるような絵になるスペインは、海を渡ってスペイン南部の海岸にたどり着いたイギリスの貴族階級によって生み出されたものである。この概念から生まれたイメージは、やがて「スペイン的」という語の意味に慣例主義を付け加え、もっとも典型的なステレオタイプを生み出すことになる。また同様に、今日、アンダルシアがスペインにとってかわったことは一つの換喩的な出来事であり、文学から映画にいたる芸術は、その影響でこのステレオタイプを受け入れたのである。

1 ラファエル・ウトウレラ・マシアス (Rafael Utrera Macías) 『スペイン映画・その歴史とながれ』“Cuatro pasos por la historia y la estética del cine español” スペイン文化シリーズ7号、上智大学 イスパニア研究センター、2000。
“Españoladas y españolados: dignidad e indignidad en la filmografía de un género”, Un siglo de cine español, Cuadernos de la Academia núm. 1, Academia de las Artes y las Ciencias Cinematográficas de España, Madrid, 1997.

しかし、現在となって、スペイン人自身も外国研究者と同様に、以前の見方とは異なる方法でこのジャンルと用語をとらえ始め、それまで伝統的であった軽蔑的な意味合いを取り去り、またその中に、郷愁の思いを超えるなにかを見いだし始めたのである。

フランコ独裁政権下における検閲制度²により映画表現における社会批判は当時許されなかったため、当時の映画監督は、社会的な批判にユーモアを被せて隠した。そのため、フランコ時代にも、エスパニョラーダというジャンルが盛んに続いてきたのである。

2 スペイン市民戦争（1936 - 39）後、勝利者側（フランコ軍）によって成立した新体制は、映画を体制の重要な味方とし国家カトリックシステムを根付かせようとした。フランコは映画を国民運動の原則のプロパガンダの道具にすることを目指し、それをコントロールすることに執着した。1940年代のスペイン映画は当時の政治的要求に答えるべくして作られたものであり、その時代の作品の平均的な質はスペイン映画の歴史の中でも非常に低いものであった。

戦後の映画産業の状況は当時の国家と同様に混沌としていた。多くのスタジオは閉鎖または空襲により壊滅的な状況におかれ、撮影用のフィルムやセット用の機材も不足していた。また大勢の技術者、俳優、映画監督らはすでに亡命していたか、もしくは服役中であり空腹や病気にさいなまれていた。

だがフランコ政権は映画作品の品質や完成度にあまり注意を払わなかった。新執行部の映画政策は、特に検閲と保護主義という二つの重点に基づいたものであった。フランコ時代の検閲「宗教の教義やモラルの原則をけなし、批判するような表現を含む映画の禁止」「司祭が映画に登場する際には、崇められ、最大の尊敬をもって扱われなければならない」「共産主義やマルクス主義に関係する映画は全て禁止。階級闘争や労働階級に関するものも同様」「マルセイユの歌を流してはいけない」「会話に革命者という言葉を使っちゃいけない」「軍隊映画の禁止。軍の精神や名誉に反するものも同様」「愛情描写に時間をかけてはいけない。キスも含む」「いかなる裸体描写の禁止」「特にオリエンタルダンスの禁止。踊り子のくねくねした動きの為」

この時代のスペイン映画の脚本化や映画監督はこのような際限のない禁止事項の数々によりどのように気難しくて文句の多い検閲官を刺激せず自らの計画を進められるかという力量を試された。

高等検閲院は台本に始まり各映画の製作過程の全てをコントロールしたが、それは世界の他の検閲システムに見られないものであった。一つの例を挙げると、1953年の「モガンボ」(Mogambo) というアメリカ映画でさえ、スペインで上映された時に、不倫関係はタブーであった為、検閲が入り、グレース・ケリー (Grace Kelly) とクラーク・ゲーブル (Clark Gable) の不倫関係をごまかす為、ケリーとその夫は兄妹として登場させられた。彼女は恋愛関係の出来る独身女性として登場したのだが、どうして、その兄妹がベッドを共にするのか、どうしてそんなにベタベタしているのか、スペイン人は非常に不思議がって、かえっておかしなものとなってしまった。

スペインの教会も独自の手法を提供しつつ検閲院に参加した。彼らにとって一番不快であったものはどんなに些細なものであっても女優の身体の露出であった。検閲院は1964年まで検閲の手法を公開せず、それまでは検閲官の気まぐれやコネが物を言わせ、彼らの愚かさを表す具体例には事欠かない。例えば、アルゼンチン映画で Alberto Zabalía 監督の Dama de compañía (1940) の中のワンシーンは牛の乳搾りが出てくることを理由に削除されたのである。

『ようこそ、マーシャルさん』（ルイス・ガルシア・ベルランガ監督）
1952年, Bienvenido, Mister Marshall, Luis García Berlanga, 1952

エスパニョラーダの全般的な特徴がありながら、庶民を苦しめるさまざまな困窮、階級性の社会構造、闇市と闇取引、権力周辺部の腐敗や、生活のあらゆる点での自由の欠如は、ひとりの「総統」という存在にすべての決断を任せきりにしていた当時のスペインと政府、つまりスペイン人が市民ではなく家臣と見なされていた全体主義体制の特徴をも良く表すものであったため、『ようこそ、マーシャルさん』とは最初の批判的なスペイン映画といわれたのも無理のないことである。

スペイン映画史には、非常に大切な映画なので、簡潔に紹介する。カステリーヤ地方の人口1,642人の小さな村、ピリャール・デル・リオ (Villar del Río) の単調な暮らしは「アンダルシア歌謡のトップスター」カルメン・バルガスと、そのマネージャーのマノロの訪れによって一変した。彼女がやってきたのと時を同じくして、政府の使節が村長のドン・パブロに会いにやってきた。マーシャルプラン委員会の一行がまもなくやって来るので、このカステリーヤの村を特に飾って歓迎するよう要請しに来たのだった。

誰も彼もアメリカ人たちの到着を心待ちにしているが、歓待の方法については意見が一致しない。村の有力者たちを納得させるだけの案が出ないまま議論は続き、ついにマノロがピリャール・デル・リオをアンダルシアの典型的な町にするという素晴らしいアイデアを思いついた。貸衣装に、花で飾った漆喰塗の小道、闘牛の飾りやたくさんのはりぼてで、町は様変わりする。今ではみんなが、みんなの夢を叶えるためにアメリカ人大量のドルを置いて行き、この貧しく退屈な生活から逃れることができると確信していた。ただ旧家の郷土ドン・ルイスだけは、このごまかしに反対していた。

マーシャルプラン委員会の一行がピリャール・デル・リオにやってきた。しかし、稲妻のような勢いでやってきた車の行例は、横断幕にも歌にも、ロシオへの巡礼の衣装とつば広の帽子で着飾った村人が振るたくさんの旗にも見向きもせず、通り過ぎていってしまった。期待はすさまじい幻滅に変わった。しかし、村人は、手に入れたがったもののせいで高くついた仕掛けの費用を払うために、ドン・ルイスやマノロ本人も含め一群となって、

持てるわずかばかりのものを差し出すのだった。静けさが村に戻り、うっとりするような夢は終わった。残ったのは太陽と希望だけだった。ベツレヘムの幼子キリストに贈り物を持ってきた東方の三博士（レイエス・マゴス Los Reyes Magos）も、ピリヤール・デル・リオの村には来てくれなかった。

『ようこそ、マーシャルさん』の意味と解釈

1940年代終わり、スペインは枢軸国支持の結果、アメリカが布告したマーシャルプラン—第2世界大戦で被告を受けた国々への無償援助—の対象からはずれていた。しかし、その後の資本主義と共産主義の急激な分裂という新しい世界秩序により、フランコ体制は前者の強力な味方、つまり後者の徹底した敵方に位置付けられていった。共産主義に対して「十字軍」の性格をもつフランコの血にまみれた勝利は、必ずしも無駄ではなかったのである。

1952年に製作、封切りされた『ようこそ、マーシャルさん』を、人々は上述のような政治・社会文化的状況の中で受け止めたのである。すなわち、スペインは経済的自給自足から脱して、徐々に国際社会へと復帰していく状態にあったのである。各国大使は漸次帰任し、スペインは共産主義諸国への冷戦態勢維持を共通の特徴とする西側陣営の一員となった。50年代の間に、国連関係の主要機関はスペインの加盟を承認するようになっていた。1955年には待ち望んだ国連加盟もなされ、又、スペイン国内の戦略地に「共同利用」という虚偽の名目で軍事基地用地を提供するという、スペイン、アメリカ両政府間の協力協定が締結されるのに時間はかからなかった。アメリカ大統領アイゼンハワー将軍のマドリッド市内凱旋パレードと、フランコへの抱擁をもってスペインの国際社会復帰が完了したと言えるだろう。



新世代の監督たち

新世代の映画人たちはかなりの数の「処女作」を作成したが上映されるにはなかなか至らず、結果として後年、作品リストを作成維持することが難しくなってしまった。映画産業は、芸術家・プロとしてのクオリティーの高い個人よりも、具体的な企画に多くの信を置いているように見える。

短編映画で腕をみがいてきた九十年代の若手映画監督たちは、一般に文学的素養は乏しく、幼児期から知悉しているビデオ、テレビ、コンピュータなどのオーディオビジュアルそのものから知識を得、そのなかで成長してきた。前の世代と比較するとき、かれらは「ユートピア不在」そして希望の喪失の世代ということが出来る。それは人生のどの局面についても共通することで、同時に職業人としての未来の不確定さも露呈している。民主主義下に生まれたかれらは、新しい社会様式をプレゼントのよういうけとった。フランコ主義を知らないかれらは過去の再考を強いられることもなく、ものごとを過去のせいにする必要もない。そのため前の世代とは違って、過去を映画のテーマとすることは、少なくとも主流とはなりえない。そして現在の物語と現代の生活様式が、かれらがつくりだすフィクションの枠組みとなっている。その物語には性がふだんにもりこまれているが、それはつねに愛とは違うものとされる。また、個人生活から仕事の場にまでいたる人格の混乱と強く結びついているが、それは登場人物と家族の意志疎通が不可能であることとけっして無関係ではない。

しかしながら、80年代や90年代以降、スペイン映画界は新しい時代を迎えることになる。その特徴として、スペイン社会の現実的で深刻な問題点を出し惜しむことなく映し出すもので、それが映画製作目的ともなっていた。次に、一体どのような社会的な問題が映画に反映されているのかを見てみよう。

1- “Los lunes al Sol”, Fernando León de Aranoa, 2002.

『月曜日に日向ぼっこ』フェルナンド・レオン・デ・アラノア監督、2002

本作品では深刻な社会問題である失業をテーマに、現在スペイン社会が直面する経済危機や失業の悲惨さを描いている。主人公達は、グローバル

化した“進歩的な”経済による犠牲者として描かれ、必死に仕事を探そうとしながらも日雇い仕事をも探しきれない状況にあるのである。全く仕事が無いという空しさと絶望という生々しい現実が描かれている。雇用環境や就労状況、女性の労働市場への加入、性差による雇用差別、伝統的性役割の変化や男女関係がどのように変化していったのかを過去の作品と比較しながら観察するには完璧な作品である。

2- “Mar adentro”, Alejandro Amenábar, 2004.

『海を飛ぶ夢』アレハンドロ・アメナーバル監督、2004)

この映画では安楽死という問題が取り上げられ、実在のラモン・サンペドロ (Ramón Sampedro) の人生に基づいている。この作品はもっとも多くの賞を受賞した映画のひとつであり、ゴヤ賞³を14部門で受賞した。

3- “Familia” Fernando León de Aranoa, 1996.

『家族』フェルナンド・レオン・デ・アラノア監督、1996.

家族形態の変容：核家族から片親家族へ、人間の孤独というテーマを取り上げ、現代における「家族」の概念を描く。近年、大きく変化したのは家族の規模である。1960年代、スペインとヨーロッパは大家族で社会が構成されていた。スペインの場合、フランコ政権は政策の一環として特別の賞を設けてまでも国民に多産を奨励した。60年代のフェルナンド・パラシオス (Fernando Palacios) 監督の “La gran familia” 『大家族』(1963年)と “La familia y uno más” 『家族と後もう一人』の2作品では、主人公の夫婦には16人の子供がおり、映画では当時の日常生活が如実に描かれる。当時は一つの家に三世代同居が珍しくなく家族は人々にとっても重要であった。映画はコメディ要素を含んでいた為に大きな成功を収めたが、当時の家父長主義や政府の都合による出産率向上のためのスローガンを映画上で披露しているとも考えられている。

家族の概念がどのように変化していったのか、また少子化問題と一人っ

3 スペイン映画アカデミーの賞。

子や片親家族の相関性、独身者率の急激な増加やその問題が社会に与える影響を考察する。

フェルナンド・レオン・デ・アラノア監督の映画“Familia”『家族』（1996年）の中にこの状況と大きなコントラストを見つけることができる。一人暮らしのサンティアゴは深い孤独を感じているが、自分の誕生日を祝う為に自分の家族の役を演じる俳優や女優の劇団を雇うことにする。この偽りの家族にも、感情の籠った様々な問題が生じ、次第に主人公サンティアゴにとっても思いよぬ感情や問題が生まれ、その描写は素晴らしく、傑作である。レオンは、映画が複雑かつ矛盾にみちた人間臭い社会の現実を発見したことをはっきりと表している。この作品は1997年にゴヤ賞（Premio GOYA）受賞した。

現代スペイン映画における移民問題

もう一つのスペイン社会において白熱し続ける問題は、スペインに大量に流入し続ける不法移民問題である。不法移民は、安価な労働力として社会から利用し且つ疎外され、その労働者を搾取する側から人並み以下の不当な扱いを受けている。そして、女性の不法移民に関しては、正規雇用の夢を抱きながらも最終的には売春婦という選択にたどり着くケースが多い。

現在のスペイン映画は人種の差別問題などに関連したテーマが頻繁に取り上げられている。というのも、移民法の強化によって不法移民達に降りかかる障害は余りあるほど増加しており、実際2002年には7万人もの不法移民が本国に送還された。

このスペイン国内の社会問題は90年代以前には存在しない。それは、それより以前はスペイン人が他国への移民となっていた時代であったからであり、反対に60、70年代にはスペイン国民がドイツやアルゼンチンへと移民していった様子を伝える映画が存在する。たとえば最も有名なのがペドロ・ラサガ（Pedro Lazaga）監督の“Vente a Alemania, Pepe”『べべ、ドイツにやってこい』（1971）などである。モンチョ・アルメンダリス（Moncho Armendáriz）監督は、南サハラからの移民について描いた作品“Las cartas de Alou”『アロウの手紙』（1990）を手始めに、スペイン内の不法移民問題に取り掛かった。また、イマノル・ウリベ（Imanol Uribe）監督は

Bwana (1996) でこのテーマに再び取り組み、サンセバスチャン映画祭最優秀賞を獲得したが、観客の反応は極めて冷静であった。女流監督イシアル・ポリャリン (Icíar Bollaín) も 1999 年に “Flores de otro mundo” 『他界の花』を発表し、カリブ海系女性移民に見られる問題に焦点を当て素晴らしい作品を完成させた。

また、女性移民と売春の関係を取り上げた優れた映画として、フェルナンド・レオン・デ・アラノア監督の “Princesas” (2005) があり、1990 年代以前では外国人女性の売春問題は映画上で社会問題として扱われることはなかった。現在、スペインは移民を送り出す側から受け入れる側へと立場が変化したが、多くの外国人女性がマフィアに騙され正当な仕事を与えないという偽りの約束のもとで売春を強いられている実態をデ・アラノア監督は映像に映し出し、第二次世界大戦中に 20 万人の慰安婦⁴を生み出した日本の過去と同様のスペインの現実を描きだした。

このテーマでキューバ移民に焦点を当てた映画も存在する。それはダビド・トゥルエバ (David Trueba) 監督の “Balseros” (2002) である。94 年夏に、とあるテレビ局の取材チームが、経済的窮地打開を理由にアメリカへ新天地を求めてアメリカ海岸沖を泳いで渡ろうとした 7 人のキューバ人の出発数日前取材した。この 7 人はのちに海上でグアテマラの避難民キャンプに助けられアメリカへの移住を達成したのである。それから 7 年の月日が経ち、この作品では彼らのアメリカでの生活やキューバに残った人達などの詳しいエピソードを加えて、「7 人のその後」を繊細に描き出した。これは現代における二つの異なった世界の間でさまよった人間ドラマである。

バルセロナでのアフリカのマグレブ人に対する差別を自戒的に描いた映画もある。これはロレン・ソレル監督による “Said” (1999) である。21 世紀のスペイン社会の日常で確実に増えてきたこの問題に取り組んだ映画は他にも、女流監督チュス・グティエーレス (Chús Gutiérrez) の

4 吉見義明『従軍慰安婦』岩波書店、東京、1995。
Yoshiaki, Yoshimi, *Esclavas sexuales. La esclavitud sexual durante el Imperio japonés*, Ediciones B., S.A., Barcelona, 2010.
Lydia Cacho, *Esclavas del poder*, Debate, 2010.
“El precio de la prostitución”, *El País Semanal*, 2 de mayo de 2010.
“Esclavas. Las cloacas del comercio sexual”, *El País Semanal*, junio 2010.

“Poniente”（2002）や、ベテラン監督であるマニエル・グティエーレス・アラゴン（Manuel Gutiérrez Aragón）の Una Rosa de Francia（2005）、そしてフェルナンド・ギレン・クエルボ（Fernando Guillén Cuervo）の “Los mánagers”（2006）などがある。

またこの場で言及しておきたい映画として、欧州でのアフリカ系移民について描いたヘラルド・オリバレス（Gerardo Olivares）による “14 kilómetros” 『14 キロ』³ という作品がある。この映画は、三人のアフリカ人青年、ビオレタ、ブバ、ムケラが、サハラ砂漠からスペイン領であるカナリア諸島までの長く危険な旅を描いたもので、この中で本来マスメディア上では表現されることのなかった点に触れている。オリバレス監督は、「この映画を通してサハラから欧州にやってくるアフリカ移民に対する欧州人の偏見を変えたかった」とコメントし、アフリカまで自ら旅行を実行してこのシナリオを完成させた。オリバレスは「テレビで我々が観るような、スペインの海岸にボートで辿り着くアフリカ移民のイメージは彼らの旅の終着の単なる一片であり、本当には表現されてはいない。私は彼らが数年もかけて渡ってくるもうひとつの海「サハラ砂漠」を横断する際の過酷さと危険性を何よりもまず映像化してみたかった。また一方で、テレビで見る移民達の疲れ切った顔や表情の裏にそれぞれのドラマがあることを示したかった」と語った。

次に、スペインの移民問題にさらに踏み込むために、女流監督イシアル・ボリヤイン（Icíar Bollain）の作品について見てみることにする。女優であり映画監督でもあるイシアル・ボリヤインは “Hola, ¿estás sola?” で成功を治めたが、次作品を監督するまで十分に思考構想を重ね十分に時間を取ったうえで二作目に臨んだ。その第二作目 “Flores de otro mundo” は “Hola, ¿estás sola?” の続編とも考えられる構成でいくつかの “Hola, ¿estás sola?” のいくつかのシーンもこの第二作で使用されている。このボリヤインの2作品を二つの要点にわけて見ていくことにする。

まず最初に、“Hola, ¿estás sola?” に三人の女性主人公が登場する。ドミニカ女性、キューバ女性、ビルバオ出身のスペイン女性で、未婚男性の多いスペインの片田舎で行なわれる独身者用の出会いパーティーに参

加する為のバスにこの三人が乗り合わせる。ここにはポリヤイン監督の現代社会を考察するという意図が存在するのだが、映画の中にドキュメンタリー性を持たせるというポリヤインの意志と執念が垣間見られる。大半が男性で占められるスペインの片田舎に向かってゆく女性達、Caravanas de mujeres⁴「女性のキャラバン」と名付けられた存在する現実を基にこの映画が作られたのである。

次に、第二の要点として、この映画は自分の人生を切り拓く為にはどんな苦勞をも辞さないエネルギーに満ちた女性達のストーリーであるという点をあげたい。“Flores de otro mundo”では二人の女性主人公が登場し、一人はビルバオの病院で働くシングルマザー、もう一人はキューバ出身の売春婦という設定である。この二人がパートナーと安定を求めスペインの片田舎で繰り広げていく出会いと人間関係。この二人の女性がそれぞれに「他界の花」であることを観ている側は次第に理解していく。

4 スペインでは農村お見合いツアーが数多く企画されており、ASOCAMU (ASOCIACIÓN de CARAVANAS de MUJERES: 農村お見合いツアー協会) という団体も存在する。同団体のホームページ <http://www.caravanasdemujeres.com> を参照。ツアーの企画や参加方法についてあらゆる詳細情報が網羅されている。

なかでも、ピレネー山中のプラン (Plan) という村で催されたお見合いツアーが社会的に大きな反響を呼んだ。

スペインは内戦後非常に貧しくマージナルプランも存在せず、職を求め地方から仕事を求め多く人間が都会に流れた。この現象はスペインの過疎化を引き起こし、多くの村が無人村となった。エリアス・ルビオが書いた本に *Burgos, los pueblos del silencio* 『ブルゴス、沈黙の村』があるがこの状況が描写されている。著者の故郷ブルゴス県だけで、20や30年前から60の無人村が存在する。スペインの中心部 (カスティアやラ・マンチャ地方) の人口密度は一平方キロ当たり50人程であるから、スペイン中には数え切れない無人村があるといえる。ヨーロッパの中でも非常に人口密度の低いスペインは、人口密度の高い日本から見れば考えられない状況ではあるが、日本より面積が大きいスペインの人口は4600万以上で、日本の人口の三分の1に過ぎない。そのうちの600万くらいは外国人移民である。現在の映画にもこの状況が描かれており、“Flores de otro mundo”『他界の花』には、独身女性との出会いの場に恵まれない農村の男性たちが「女性のキャラバン」つまり、「お見合いツアー旅行」を主催する。その中にはスペインの女性もいるが、移民ラテンアメリカの女性もいる。スペインの奥地の寒村から出たことのない男性組は比較的視野が狭く閉鎖的であるのに対し、女性組は外国人もおり当然世界観も異なり、経済的自立している女性も存在し、未来に対し希望に溢れる女性も多い。この映画は人間同士の連帯感、愛情問題、そして男女関係についての傑作といえる。

多くの独身男性が居住しているアラゴン地方のピレネーで、1985年のある日、村の映画館に米国の『Westward the women』“Caravana de mujeres” (1951年) という映画が上映され、その影響で、映画さながらの「お見合いキャラバン」が実現する。世界中の女性が花嫁として募集され、スペインだけでなく世界的に有名な出来事となったのである。

現代社会における女性の精神的な孤独の描写に長けているポリャリンは、人種と文化を織り交ぜながら、伝統、文化、いのち、その土地独自の気候的要素や風景にいたるまでありとあらゆる要素をもって女性主人公が抱える異文化への順応を強いられる女性の苦難を描きだす。それは社会的個人的な不信感、そして人々の奥深くに根差す差別観など、ありとあらゆるケースで異文化への順応に際しては障害となりえるものである。

ポリャイン監督は特定の概念を掲げこれらの問題点を描いているわけではない。強調することなくモラルを振りかざすわけでもない。つまり、さまざまな種類の主人公を設定し、それら主人公を幅広い観点から描き出す。彼女は複数の異なる主人公達の個性的要素をうまく一つにまとめ、メロドラマに陥り、ドラマティック性に欠ける点をカバーしながら映画を構成していくことのできる監督である。

ポリャイン監督のスタイルは第一作目の“*Hola, ¿estás sola?*”にも同様に見ることができ、ポリャイン独自の要素がうまく調和して表れていると言えるであろう。

ポリャインの現代的で透明感のある視点は、ドキュメンタリー映像とうまく合致する。そのスタイルは、フランスの田舎の姿をラディカルに且つあからさまに描き出したエリック・ロメール (Eric Rohmer) 監督の1993年の作品「木と市長と文化会館」と共通するものがある。主人公の個々のストーリーとその個性は文化人類学的観点からも分析することができるし、実際の人々の生活のドキュメンタリー的な視点はフィクションをより豊かにし、それにより、真実にたどり着くことができる。このポリャインと共に共同シナリオ作家としてこの映画に取り組んだフリオ・リヤマサレス (Julio LLamazares)⁵ は、マスコミ受けの良さよりも、スペクタクルのあとにやって来るとごく普通の日常的に神経を注いだ。それゆえに、映画のストーリーは、女性主人公のそれぞれの人生での大きな出来事の「その後」の日常、つまり祖国や家族から遠く離れ、誰もがもう彼女達を思いださなくなった頃に彼女達はまだその同じ場所で自分たちの人生を切り拓く為

5 “*Flores de otro mundo*” の脚本はイシアル・ポリャインとフリオ・リヤマサレスが小説 *La lluvia amarilla* 『黄色い雨』を元に共著。*La lluvia amarilla* はスペインの地方の過疎化についての代表的な小説である。

奮闘する、この映画はそのような姿に焦点を当てている。

“Flores de otro mundo”も、ストーリーが進むうちに、いくつかのシーンで、それほどドラマティックでもない映像が、実は感情表現において、極めて感動的なものとなっている。終了から30分ほどでは静寂のなかにもそれぞれの主人公の表情に深みが生まれ、カメラがそれを追っている。そんな中、希望の兆しも映像として映し出される、たとえば村の片隅で遊ぶ子供たちの姿である。それは未来への希望を象徴しつつ、過疎化しつつある田舎の問題を決してごまかすことなく描写しつづける。そんな未来への希望を暗示するシーンで再び都会から女性達を乗せてやってきたバスが登場するのである。これこそポリヤインの人生への賛歌であり、この作品が称賛に値する作品であることを示し、“Flores de otro mundo”でポリヤインはカンヌ映画祭で国際映画賞を獲得した。

ポリヤインにとってのもう一つの普遍的テーマがある。それは家庭内暴力(Domestic Violence 以後 DV)である。このテーマに取り組んだ映画が2003年に発表した“Te doy mis ojos”『Take my eyes』である。この作品を通して50年前のスペインでは扱われることのなかったDVという現代の問題を掲示したのである。50年前にはDVは犯罪であるという認識が存在せず、もちろんのこと社会問題としても取り上げられることはなかった。また、ポリヤインに先んじて1999年に父親の暴力により壊された娘と妻の人生を描いた“Solas”『ローサのぬくもり』と言う映画がベニート・サンブラノ(Benito Zambrano)監督によって製作された。

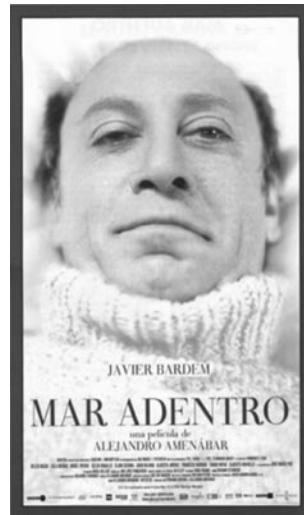
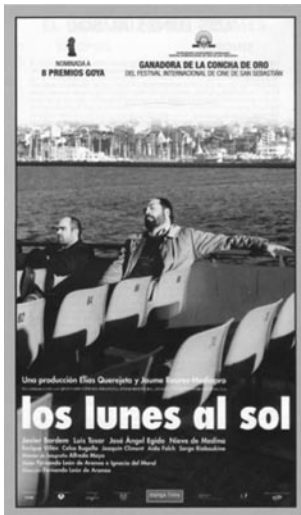
家庭内暴力は現代社会においてもっとも深刻な問題の一つであり、歴史的にも中世から途切れることなく続いてきたどの社会にも起こりつづけている問題であり、それは国を選ばず、先進国にも後進国にも平等に存在する。ポリヤインの映画には善悪のどちらかという単純な二元性で物事を批判するような単純さからは程遠く、ただ冷静に社会の問題を描くという美德がある。

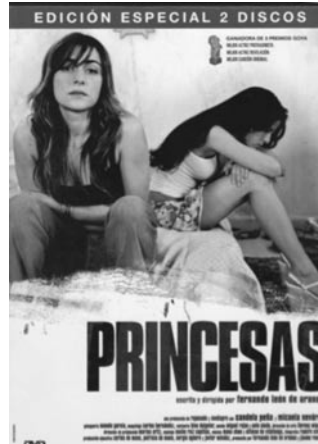
ポリヤインが“Te doy mis ojos”で示すように、家庭内暴力はもっとも複雑な問題であり、過去150年における社会構造が変化してきたにもかかわらず、この問題の根源は根付き存在しつづけて、結果としてこの問題が解決されていくことがなかったのである。

この“Te doy mis ojos”は家庭内暴力における複雑な疑問に答えようとした大作である。なぜ自分を痛めつけるパートナーとの生活を10年以上もの長い間我慢するのか？なぜ離婚しないのか？それどころか離婚するどころか愛情は変わらないと言い張るのか？先進国では4人に一人の割合で女性がパートナーによる暴力を経験しているという。経済的な依存ゆえに別れられないという理由だけでは説明はつかず、根底に複雑な理由が絡み合っていると考えられる。これらの疑問がこの作品では提示され、さらに、ただ被害者の立場からだけではなく、加害者からの観点からも描かれている。統計によると、スペインは毎年約70人の女性がパートナーによって殺害されている。この数字を減らすにはどうしたらよいのか、そのための対策は時間をかけてでも不可欠である。

この作品は、ゴヤ賞を7部門で受賞し、ボリヤインはゴヤ賞最優秀映画賞と監督賞を受賞した。

現在、スペイン映画界は多くの優れた若手映画監督を輩出している、彼らの今後の作品に期待は大きい。





BIBLIOGRAFÍA 参考文献

- Aguilar, Pilar, *Mujer, amor y sexo en el cine español de los noventa*, Editorial Fundamentos, Colección Arte, Madrid, 1998.
- Arisó Sinués, Olga, Mérida Jiménez, Rafael M., *Los géneros de la violencia, Una reflexión queer sobre la “violencia de género”*, Editorial Egales, Barcelona, 2010.
- Benavent, Francisco María, *Cine español de los noventa*, (Diccionario de películas, directores y temático), Ediciones Mensajero, Bilbao, 2000.
- Cacho, Lydia, *Esclavas del poder*, Debate, 2010.
- Caparrós Lera, José María, Crussels, Magí, y España, Rafael (de), *Las grandes películas del cine español*, (prólogo de Luis García Berlanga), Ediciones JC, Madrid, 2007.
- Carmona, Luis Miguel, *Hechos y anécdotas del cine erótico*, Ed. Cacitel, S.L., Madrid, 2004.
- 小池昌代、「黄色い雨、死者たちの存在感に言葉を失う小説」、朝日新聞、

2005年、10月30日。

Geulen, Christian, *Breve historia del racismo*, Alianza Editorial, Historia, Madrid, 2010.

Herederó, Carlos F., *Veinte nuevos directores del cine español*, Cine y comunicación, Alianza Editorial, Madrid, 1999.

Jaime, Antoine, *Literatura y cine en España (1975-1995)*, Ed. Cátedra, Signo e Imagen, Madrid, 2000.

López, José Luis, *Diccionario de películas españolas*, Ediciones JC, Madrid, 2000.

Llamazares, Julio, ヤマザレス・フリオ :

-*La lluvia amarilla*, Ed. Seix Barral, Barcelona, 1988.

-『黄色い雨』木村榮一訳、ソニー・マガジンズ、東京、2005.

Payán, Miguel Juan, :

-*La historia de España a través del cine*, Ed. Cacitel S.L., San Sebastián de los Reyes, Madrid, 2007.

-*El cine español actual, Conversaciones con Pedro Almodóvar, Alejandro Amenábar, Vicente Aranda, Bigas Luna, Eduardo Campoy, Jaime Chávarri, Alex de la Iglesia, Ricardo Franco, Carlos Saura, Fernando Trueba, Imanol Uribe*, Ediciones JC, Madrid, 2001.

-*Las 100 mejores películas españolas de la historia del cine*, Ed. Cacitel S.L., San Sebastián de los Reyes, 2005.

-*Las cien mejores películas sobre la Guerra Civil española*, Ed. Cacitel S.L., San Sebastián de los Reyes, 2005.

Pérez Cantó, Pilar (edit,) *El origen histórico de las violencia contra las mujeres*, Ed. Dilema, Madrid, 2009.

Puigdomènech, Jordi, *Treinta años de cine español en democracia (1977-2007)*, Ediciones JC, Madrid, 2007.

Rojas Marcos, Luis, *Las semillas de la violencia* (nueva edición ampliada), Ed. Espasa, Madrid, 2004.

Rubio, Elías, *Burgos, los pueblos del silencio*, Ed. Aldecoa, Burgos, 2001.

Utrera Macías, Rafael, ウトゥレラ・マシアス、ラファエル :

『スペイン映画・その歴史とながれ』“Cuatro pasos por la historia y la estética del cine español” スペイン文化シリーズ7号、上智大学イスパニア研究センター、2000.

“Españoladas y españolados: dignidad e indignidad en la filmografía de un género”, Un siglo de cine español, Cuadernos de la Academia núm. 1, Academia de las Artes y las Ciencias Cinematográficas de España, Madrid, 1997.

Welzer-Lang, Daniel, *La violencia doméstica a través de 60 preguntas y 59 respuestas*, Psicología Alianza Editorial, Madrid, 2007.

吉見義明『従軍慰安婦』岩波書店、東京、1995.

Yoshiaki, Yoshimi, *Esclavas sexuales. La esclavitud sexual durante el Imperio japonés*, Ediciones B., S.A., Barcelona, 2010.

Zabala, Juan, Castro-Villacañas, Elio y Martínez, Antonio C., *El cine español contado con sencillez*, Ed. Maeva, Madrid, 2007.